

平成26年度 共学部 特別進学コース
第1回 午前 入学試験問題

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」（ ）などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、大仏殿を建立する。
- 2、夏休みは常夏のハワイを楽しんだ。
- 3、かかったお金を折半する。
- 4、スター選手が古巣の球団に戻る。
- 5、間違つて類似品を買ってしまった。
- 6、ハイユウにあこがれる。
- 7、それはシュウチの事実だ。
- 8、親にジュウジュンな子供に育つ。
- 9、旅行先でユウラン船に乗る。
- 10、日本コユウの生物。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

まとまらないまま合唱コンクールに出た。歌は一本調子だし、緊張したのかピアノはいつも以上にミスばかりだし、こんなに恥ずかしい舞台には二度と立ちたくないと思ったほどだ。

拍手はまばらで、もちろん賞には入らず、舞台を降りて体育館の客席に戻った私たちには満足感のかけらもなかった。①クラスの一体感など生まれようもない。それでも、ともかく終わった。これで、あの歌とはお別れだ。受験と合唱コンクール、ふたつも綾のついたあの歌を、もう歌うこともないだろう。体育館に並べられた椅子にすわり、私は、今日のこともぼんやりの膜にくるんで忘れてしまおうと思った。それであとはまたぼんやりとした日々に戻るだろう。

私の望みどおり、ぼんやりはすぐにこの手に戻ってきた。合唱コンクールとその前後の、苛立ちも恥もいざこざも、すべてなかったことのように穏やかな日々。そのうちにまた次の行事がやってくるのだ。——マラソン大会だ。次は、初冬のマラソン大会だった。

合唱コンクールに負けず劣らずマラソン大会も人気がない。あたりまえだと思う。ただ走るだけで苦しいばかり、しかもまったくの個人競技だ。

どうしてこんなものが学校行事として存在しているのか理解ができない。そんなふうに感じるのは私の運動神経が並外れて悪いからで、もしかしたらマラソン大会を楽しみにしている人も中にはいるのだろうか。

その日が近づくにつれ憂鬱になる。正門を出発して住宅地を抜け、大きな橋のたもとに出たら川べりの道に戻ってくる。七キロ弱のコースになる。運動部でよほど鍛えてでもない限り、走り通せるわけがない。しかも、A学校に戻ってきててもそこが終点ではない。ゴールを盛り上げるためか、グラウンドをさらに一周することになっている。あの一周が特につらい。ほとんどの生徒がゴールしてしまい、あちこちにすわつて談笑している前を、ひとりで最後まで走る。体力的にも精神的にもきつい一周だ。

サボろうか、どうしようか、迷いながらも結局は登校した。B去年もこうだった。休もうと思っていたのに、朝、母の顔を見て気が変わった。家にいて母と一日じゅう顔をつきあわせているよりは、マラソン大会のほうがましだと思ったのだ。いつもの行事と同じようにぼんやりとやり過ごせばいいだけだ。——とはいえ、走るのはCつらかった。今年もDを後悔するのだろう。空を見上げ、ため息をつく、息がけず息が白い。寒い朝だった。

スタートした時点ですでに足が重かった。ガンバロウ、と肩を叩いてくれた佐々木さんがはるか前方へ飛び出していく。ジャージ姿の生徒たちに混じって短パンの元気な子がいると思えば意外にも原さんだ。校門を出たあたりで私はもう最後尾のグループにいた。早くも息が上がっている。脇腹が痛い。どう足掻いてもこのままピリを走ることになるだろう。すぐに私は走るのをあきらめて、脇腹をさすりながら早足で歩く。あつというまに周りに誰もいなくなつた。ときどき前方にジャージを見たけれど、すぐにまた見えなくなってしまう。住宅地を抜け、橋の傍らで折れて川沿いを走る。歩く。走る。歩くほうが多い。息が苦しい。

何をやっているんだろうと思う。今ごろは歌を歌っているはずじゃなかったか。こんなところを息を切らして歩いたり走ったりする代わりに、音楽と取っ組みあっていたかった。肩で息をして歩く。E早足ときえいえない。のろのろと足を進めながら、見上げた土手にススキが風に吹かれていた。ススキに呼ばれるように、ふらふらと川のほうへ道を外れる。荒い息を整えながら、低い土手を上る。向こうは灰色の大きな川だ。その流れを眺めるうちに、不意に自分が今どこにいるのかわからなくなってしまう。今の私は音楽からずいぶん遠い場所に立っている。そのことだけは、手で触れることができるくらいはっきりとわかった。

③土手の上に佇んでいると、遠くから威勢のいい自転車が来るのが見えた。見えたと思うまにぐんぐんこちらへ近づいてくる。乗っているのは小ぶりの入道のような男だ。危険を感じて土手の端に寄つたのに、私をめがけて突き進んでくる。立ちすくむ私の真ん前で、自転車は急ブレーキをかけた。驚いていると、走れえ、と自転車の入道が怒鳴つた。どこかで見たような顔だと思ったら、明泉の先生だったらしい。慌てて走り出す私のすぐ後ろを、走れ、走れ、と自転車で追いかけてくる。もう走れないんだよう、と口の中だけでいって、半分泣きそうになりながら土手から歩道へ下りて走る。足が痛い。脇腹も痛い。学校まではまだ遠い。息が上がリ、心臓が飛び出しそうだ。先生はどこまでもついてくる。どうやら

ほんとうに私が最後の生徒だったらいい。

校門をくぐると、すでに備品の後片づけをしている生徒や先生が目に入る。私のすぐ横を伴走していた自転車がそこようやく止まる。

「ファイトファイト！ もう一息だ！」

かろうじてうなずいてみせる。足がもう前に出ない。まだこれからグラウンドを一周しなければならないなんてつらすぎる。自転車置き場の横を過ぎ、体育館の裏手を通り、やっとグラウンドが見えてくる。ジャージの生徒たちが散らばっている。その明るい場所へ、私は一向に近づいていかないような気がする。走っているのか歩いているのか自分でもわからない。足は上がっているのか、地を這っているだけなのか。それより、この心臓はだいたいようぶなのか。耳か、頭か、もしかすると目の奥が、ガン、ガン、ガン、と規則正しく鳴っている。このガンはラ。ドレミファソラ、の、ラだ。そんなことがわかったってなんにもならない。絶対音感なんてどこかへ行ってしまう。

汗だくになって走りながら、私の目はトラックの茶色しか見ていない。私の耳は、ガン、ガン、ガン、——と、それからかすかな旋律をとらえる。どこからか、歌が聞こえる、ような気がする。最初はひとつの声。か細い、頼りない旋律だったのが、次第に声が集まって大きく力強くなっていく。幻聴？ ではない。荒い息と心臓の鼓動と耳鳴りと、それらを超えて歌が聞こえる。何の歌だかわからなかった。ただ、いつか聞いたことのある歌だと思った。顔を上げて、あたりを見る。足がふらつき、視界が揺れる。その隅に、ジャージの団がたまっているの見える。ふたり、三人、と集まってくる。まんなかにいるのは短パンの小柄な生徒だ。

はっとした。まさか、と思う。これはもしかして、あの歌、だろうか。あの、私たちが合唱コンクールで歌った歌。最後までうまく歌えなくて、それどころかクラスが全然まとまらず、わずかな自信までなくしていた。④あのとこの歌とは、まるで別の歌に聞こえる。でも、たしかにあの歌だ。こんな歌だったのか。こんなに素朴で、いきいきと生きるよろこびを歌った。⑤歌だったとは。若草が薫り、雲雀が舞う空の下で、若い田舎娘たちが裸足で戯れながら歌を歌っている。トラックを走りながら、目の前にその光景が浮かぶようだ。

私はまったく考え違いをしていた。歌わせよう、歌わせようとした。技巧を重視して、歌う動機も気持ちも置き去りにした。薄暗い教室で、譜面から目を離さず、注意ばかり飛ばして歌わせる歌では決してなかった。聴かせよう、感動させようと歌う歌でもない。これは、まぎれもなく彼女たちの歌、そして私たちの歌だ。

足が震えそうだ。胸が高鳴っている。マラソンのせいばかりではない。曇る目に、原さんが映っている。牧野さんも柴崎さんも、中溝さんもある。歌のはじまりに私たちは立ち会っている。ここにいるみんなが、何もなかったこの場所に歌のはじまるところを確かに見た。

もともと、歌のはじまりは⑥こういうものだったのかもしれない。よろこびや、祈りや、誰かに届けたい思いを調べに乗せる。同級生たちが私に向かって——おそらくは学校一、足の遅い私を励ますために——いつのまにか声を合わせたように。その自然な感情の高まりこそが歌だったんじゃないか。足を引かず涙を拭いながら私は走っている。歌声が大きくなる。あと少しで、ゴールだ。

(宮下 奈都「よろこびの歌」より)

(注1) 「あの歌」…… 「私」がある音楽大学付属高校を受験したときに歌った課題曲のこと。その学校の受験に失敗して現在は音楽科のない普通の女子高校に通っている。合唱コンクールでもその曲を選び、「私」は指揮者を務めた。

(注2) 「綾」…… 複雑な事情。

(注3) 「明泉」…… 「私」が現在通っている高校。

(注4) 「絶対音感」…… 耳で聞いただけで、それがどの高さの音であるかを聞き分ける感覚。

問一、——線①「なかった」の主語を文章中から探し、一文節で正しく抜き出して答えなさい。

問二、——線②「今日のことも」とありますが、「私」が「今日のこと」と一緒に「ぼんやりの膜にくるんで忘れてしまおうと思った」こととはどのようなことですか。文章中の言葉を使って二十字で答えなさい。

問三、

A	・	B	・	C	・	E
---	---	---	---	---	---	---

にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|----------|--------|--------|-------|
| ア、A—やっと | B—もはや | C—やっぱり | E—たしか |
| イ、A—やっぱり | B—たしか | C—たしか | E—もはや |
| ウ、A—たしか | B—やっぱり | C—もはや | E—やっと |
| エ、A—やっと | B—たしか | C—やっぱり | E—もはや |

問四、

D

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | |
|------------------|---------------|
| ア、休もうと思っていたこと | イ、サボらなかったこと |
| ウ、最後まで走りきらなかったこと | エ、歩くほうが多かったこと |

問 五、——線③「土手の上に佇んでいる」とありますが、このときの「私」の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、次々と同級生たちに抜かれて、自分が最後になってしまったのが悔しいと思っている。
イ、運動神経が並外れて悪いのに、七キロ弱も走らなければならないのは面倒くさいと思っている。
ウ、本当は音楽の勉強をしたかったのに、それがかなわないことをつらいと思っている。
エ、川を見ながら走っていたら、自分が迷子になっていることに気づいて心細いと思っている。

問 六、——線④「あのときの歌とは、まるで別の歌に聞こえる」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、抜き出して答えなさい。

合唱コンクールでは 1、二十四字 まま歌わせていたが、今聞こえてくる歌は同級生たちが 2、八字 歌ってくれた歌だから。

問 七、——線⑤「歌だったとは」とありますが、この後に省略されていると思われる言葉を考えて七字以上十字以内で答えなさい。

問 八、——線⑥「こういうもの」について、次の問いに答えなさい。

- 1、「こういうもの」を言い換えた言葉を文章中から探し、十字以内で抜き出して答えなさい。
- 2、具体的にいうと、どういうことですか。「～こと」につながる言葉を文章中から二十五字程度で探し、最初と最後の五字ずつを抜き出して答えなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人びとはバラバラなままで生きていく。価値観は多様化する。ライフスタイルは様々になる。それは悪いことではないだろう。日本人はこれからずっと、バラバラになっていく。

しかし、人間は社会的な生き物なので、バラバラだけでは生きていけない。私たちはどうしても、社会生活を営んでいくうえで、地域社会で決めているかなくてはならないことがある。

いままでは、少なくとも一九八〇年代までは、遠くで（霞が関で）、誰かが（官僚が）決めていてくれたことに、何となく従っていれば、いろいろ小さな不都合はあったとしても、だいたい、みんなが幸せになれる社会だった。しかし、いまは、自分たちで自分たちの地域のことについて判断をし、責任を持たなければならぬ。その判断を誤ると、夕張市のように自治体でさえも潰れる時代が来てしまったのだ。

ただ、この一点が変わったために、日本人に要求されているコミュニケーション能力の質が、いま、大きく変わりつつあるのだと思う。いままでは、遠くで誰かが決めていることを何となく理解する能力、空気を読むといった能力、あるいは集団論でいえば「心を一つ」「一致団結」といった「価値観を一つにする方向のコミュニケーション能力」が求められてきた。

A、もう日本人はバラバラなのだ。

B、日本のこの狭い国土に住むのは、決して日本文化を前提とした人びとだけではない。

C、この新しい時代には、「バラバラな人間が、価値観はバラバラなままで、どうにかしてうまくやっていく能力」が求められている。

私はこれを「D 性から E 性へ」と呼んできた。

「平田君は、自分の好きなことは一生懸命、集中して頑張るけれども、どうも協調性に欠けるようです」と小学校一年生から通信簿に書かれてきたような人間が、作家や芸術家になる。私自身、自分の好きなことしかやってこなかったし、協調性はないものと自覚している。

しかし、演劇は集団で行う芸術なので、演劇人には「社交性」はあるのだ。私たちは、幕が下りるまではどんな嫌な奴とでも、どうにかして仲良くする。プロの世界などはひどいもので、舞台上では、「あなたがいないれば死んでしまうわ」と言っているにも、楽屋に帰ればそっぽを向いている連中もたくさんいる。それでいい舞台ができるのなら、私としてはまったくかまわない。これもまた「社交性」だ。

しかしこの社交性という概念は、これまでの日本社会では「上辺だけのつきあい」「表面上の交際」といったマイナスのイメージがつきまとった。私たちは、「心からわかりあう関係を作りなさい」「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」と教え育てられてきた。

しかしもう日本人は心からわかりあえないのだ……と言ってしまうと F もふたもないので、たとえば高校生たちには、私は次のように伝えることにしている。

「心からわかりあえないんだよ、すぐには」

「心からわかりあえないんだよ、初めからは」

この点が、いま日本人が直面しているコミュニケーション観の大きな転換の本質だろうと私は考えている。

心からわかりあえることを前提とし、最終目標としてコミュニケーションというものを考えるのか、「いやいや人間はわかりあえない。でもわかりあえない人間同士が、どうにかして共有できる部分を見つけて、それを広げていくことならできるかもしれない」と考えるのか。

「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」という言葉は、耳に心地よいけれど、そこには、心からわかりあう可能性のない人びとをあらかじめ排除する^① シマ国・ムラ社会の論理が働いてはいないだろうか。

実際に、私たちは、パレスチナの子どもたちの気持ちはわからない。アフガニスタンの人びとの気持ちもわからない。

しかし、わからないから放っておいていいというわけではないだろう。価値観や文化的な背景の違う人びとも、どうにかして共有できる部分を見つけて、最悪の事態である戦争やテロを回避するのが外交であり国際関係だ。

好むと好まざるとにかかわらず、国際化する社会を生きていかなければならない日本の子どもたちに、より必要な能力はどちらだろう。もちろん

D 性がなくていいとは言わないが、日本の子どもたちは世界標準から見れば、まだまだ集団性は強い方だ。ならばプラスαの能力として、これからの教育が子どもたちに授けていかなければならないのは、この「E 性」の方なのではないか。

読者諸氏は、PISA調査 (Programme for International Student Assessment) という名前を聞いたことがあるだろう。OECD (経済協力開発機構) が、参加各国の一五歳を対象に三年ごとに行っている世界共通の学力調査だ。

調査項目は「読解力」「科学的リテラシー」「数学的リテラシー」、そして二〇〇九年からは一部の国で「デジタル読解力」が実施されている。このうちの、特に「読解力」の項目で、日本の子どもたちの成績が、二〇〇〇年の八位から、一四位、一五位と徐々に後退して、これが学力低下問題の議論の発端となった。

実際には、参加国数が三二、四一、五七、六五カ国と増えてきたこと、上位国の差は僅差^{きんさ}であって日本の成績が有意に下がっているわけではない。結論ありきの^②「ためにする議論」であった。また、二〇〇九年には、日本は八位と少し盛り返している。

(中略)

もちろん、日本の子どもたちの学力に、まったく問題がなかったわけではない。たとえば日本の子どもたちは一般に、白紙回答率が高いと言われている。学びのモチベーションが低下しているので、少しわからない問題があると、回答欄に何も書かずに試験を終えてしまうのだ。

あるいは、複数以上の回答がある問題に対しての白紙回答率が高かったとも言われている。日本の学校では、教員が正解を抱え持っていて、生徒がそれを当てるような授業を続けてきたために、複数の回答がある設問に対して、子どもたちは何を聞かれているのかさえわからずに戸惑ってしまうのだ。

この手の設問で、日本の教育界にショックを与えたのが「落書き問題」と称される設問だった。以下、その内容を少し端折^{はしよ}って書く。ネット上に、「学校の壁に落書きが多くて困っている」という投書があった。一方で「いや落書きも、一つの表現ではないか。世の中にはもっと醜悪^{しゅうあく}な看板が資本の力で乱立しているではないか」という投書があった。

「さて、どうでしょう？」

という設問である。「さて、どうでしょう？」と聞かれても、日本の多くの子どもたちは、何を聞かれているのかさえわからなかった。落書きは悪いに決まっているから。

私は設問を少し変えて、学生たちに問うてみる。

「では、落書きが許される場合は、どんな場合でしょう。自分のことでもいいし、社会的にでもいいです」

学生たちは少し考えてから、以下のような発言をする。

「その落書きを気に入ったら」……正解。

「その落書きに芸術的な価値があったら」……正解。

「すぐに落とせるものなら」……なるほど、寛容だね。正解。

中学生から得た答えで私が気に入ったのは、「明日、G だったら」……この視点の転換はとても素敵だ。正解。そして、数百人に一人だが、一定の割合で次のような答えをする学生がいる。

「独裁国家だったら」

もしもあなたが、独裁国家の日本大使館に勤務していて、壁に「打倒〇〇体制」と落書きされたとしたら、「まったく落書きをするなんてけしからん。道徳がなつとらん」と嘆くだろうか。その、命がけで書かれたはずの落書きを、公衆道徳の問題だけで片づけられるだろうか。

落書き問題が問いかけているのは、文化や国家体制が違えば、落書きさえも許される局面があるという点だ。そして、^③落書きでしか表現の手段がない人びとも思いを馳^はせるという能力こそが、PISA調査が求める異文化理解能力の本質だ。

(中略)

このような話を教育関係の講演会ですると決まって、「あ、金子みずぐですね。『みんなちがって、みんないい』ですね」と言う先生方がいる。私はそうは思わない。そうではないのだ。

^④「みんなちがって、たいへんだ」

という話をしているのだ。

OECDの基本理念は、多文化共生にある。

多文化共生とは何か。それは、企業、学校、自治体、国家など、およそどんな組織も、異なる文化、異なる価値観、異なる宗教を持った人びとが混在していた方が、最初はちよつと面倒くさくて大変だけれども、最終的には高いパフォーマンスを示すという考え方だろう。

先に見たように、成長型の社会では、ほぼ単一の文化、ほぼ単一の言語を有する日本民族は強い力を発揮した。しかし、成熟型の社会では、多様性こそが力となる。少なくとも、最新の生物学の研究成果が示すように、多様性こそが持続可能な社会を約束する。

だとすれば、これから国際社会を生きていかなければならない子どもたちには、「最初はちよつと大変だけれど」の、その「大変さ」を克服する力をつけていこうというのがPISA調査の最大の眼目だろう。

しかし日本では、調査結果のじり貧状態だけに目がいつて、学力低下の議論が巻き起こり、教科学習のコマ数を増やし、せっかく作られた総合的な学習の時間を減らすという愚挙が行われた。二〇〇〇年代後半の日本の教育政策がいかにトンチンカンなものになっていたかがわかるだろう。それはある種の教育の鎖国状態と呼んでもいい。

みんなちがって、たいへんだ。

しかし、この「たいへんさ」から、目を背けてはならない。

(平田 オリザ「わかりあえないことから」コミュニケーション能力とは何か」より)

問 一、 にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、なぜなら イ、さらに ウ、さて エ、しかし オ、だから

問 二、——線①「シマ国・ムラ社会の論理」とはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、自分と同質の価値観を有する者とだけ、交流を密に持とうとすること。
イ、自分と同質の価値観にとられ、他を受け入れる心の余裕がないこと。
ウ、自分と異質の価値観を有する者を徹底的に攻撃しようとする事。
エ、自分と異質の価値観を認め、その価値観に頭から従おうとすること。

問 三、・ にあてはまる言葉を文章中から探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

問 四、——線②「結論ありきの『ためにする議論』」とありますが、

1、どのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、どんな事情があったとしても、日本の学力低下を問題視する議論の流れは変わらないということ。
イ、どんな事情があったとしても、世界各国で「読解力」が伸び悩む流れは疑いのような事実であること。
ウ、どんないきさつがあったにせよ、先進国の学力低下は止めようのない流れであるということ。
エ、どんないきさつがあったにせよ、新興国の大幅な学力伸長の流れは変わらないということ。

2、この「議論」の結果、どのような対策が取られたのですか。文章中から三十五字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問 五、 にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。

問 六、 にあてはまる表現を五字程度で考えて答えなさい。

問七、――線③「落書きでしか表現の手段がない人びとも思いを馳せる」とはどのようなことですか。文章中の言葉を使って四十字以内で説明しなさい。

問八、――線④「みんなちがって、たいへんだ」と筆者が考える理由は何ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、異質な考えをあまりにも主張しすぎると、逆にお互いに溝が生まれ、歩み寄ることが難しくなるから。

イ、異質な文化を受け入れるには、長い共同生活の中で個性をすりあわせる必要があるから。

ウ、異質な考えをお互いに持っているとして、どうしても過激な考えが主流になっていくから。

エ、異質な文化のもとに育つと、価値観の違いが生じ、同じ方向性の回答を期待できないから。

問九、筆者の主張と合っているものを、次から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、日本の教育の方向性は、世界の流れと逆行してはなはだおかしい。
- イ、国際化を余儀なくされる現代において、価値観はある程度そろっていることが望ましい。
- ウ、試行錯誤を繰り返す日本の教育は、今後も迷走を続けていくと思われる。
- エ、国際化が進行中の現代、価値観を統一することは、もはや不可能と言って良い。
- オ、演劇を仕事にしている者は、自分の世界を持っていて、社会性に^{とほ}乏しい人が多い。

問題は次ページに続きます。

第5回 都市大グループ
を結ぶ夢の旅企画

塩尻一等々力
(都市大塩尻高) (都市大等々力中高)

サイクリングツアー 2014



一都三県を
駆け抜ける夏!

2014.7/19(土)～21(祝)
主催：都市大等々力サイクリング実行委員会

長野			山梨			神奈川	東京				
塩尻	諏訪湖	富士見	甲府	勝沼	大月	相模湖	高尾山	八王子	府中	成城	等々力
S		C		S		C	S				G
フルコース 215km			ハーフコース 110km				日帰りコース 45km			ゴール	
192km 166km			127km 81km			55km	32km 18km 5.5km			S スタート／G ゴール C チェックポイント	

- 大会概要
- ①この大会は速さを競うものではありません。安全運転で完走を目指して下さい。

②各コースのスタート地点とチェックポイントに宿泊場所と補給ポイントを用意します。
- 参加資格
- ①高校生以上の自己責任でサイクリングができる方。

②中学生以下の参加者については、父母または高校生以上の兄弟もしくは、父母と同等の全責任を負える方が同伴して参加することを必要とします。

参加費	高校生以上	中学生	小学生以下
(A) フルコース	17,000円	/ 10,000円	/ 8,000円
(B) ハーフコース	12,000円	/ 7,000円	/ 6,000円
(C) 日帰りコース	一律 5,000円		
※費用には、宿泊代・食事代を含みます(ただし、日帰りコースを除く)。 ※スタート地点まで自転車の運送を希望する場合、お一人様2,000円の運送料を別途頂きます。			
受付期間	平成26年3月17日(月)～4月25日(金)まで。 ※期日厳守。ただし、定員になり次第受付終了します。		
定員	(A) フルコース 800名	(B) ハーフコース 500名	(C) 日帰りコース 200名
出発日時	(A) フルコース 19日 9:00	(B) ハーフコース 20日 9:00	(C) 日帰りコース 21日 9:00
走行時間	(A) フルコース 14～18時間	(B) ハーフコース 7～9時間	(C) 日帰りコース 3～4時間
※それぞれのコースの走行時間の目安です。実際の所要時間は諸条件によって異なります。			
申込方法	実行委員会HP内の「大会エントリーページ」にアクセスしてお申し込み下さい。		

問 一、このパンフレットは、何を目的にしたものですか。二十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問 二、あなたが、パンフレットの日程で大会に参加する場合、以下の条件ならば最低いくらの参加費用が必要ですか。金額を漢数字で答えなさい。

【条件1】フルコースに参加する。

【条件2】自転車はスタート地点までの運送を希望する。

問 三、このパンフレットには、「実際の走行時間は諸条件によって異なります」と記載されています。具体的にどのような条件が実際の走行時間に影響を及ぼすかを考えたとき、次の①～⑥のような回答を思いついたとします。これらの回答以外で考えられる条件を簡潔な表現で一つ答えなさい。

【回答例】

- ①天候や気象状況
- ②参加者の体力の差
- ③参加者の当日の体調
- ④道路の混雑状況
- ⑤自転車の具合や性能の差
- ⑥突発的なアクシデント

第1回 午前 中学校入学試験問題〔国語〕 解答用紙

受験番号	
氏 名	
評 点	

6		1	
	ハイユウ		建 立
7		2	
	シユウチ		常 夏
8		3	
	ジュウジュン		折 半
9		4	
	ユウラン		古 巣
10		5	
	コユウ		類 似

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問一

問二

問三

問四

問五

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問一

問二

問三